

宝寿の風

第1号

発行者
宝寿院住職
田辺信雄
TEL 62-5739

宝寿院住職 田辺信雄

宝寿院の檀家の皆様には、先祖代々四〇〇年以上の長い年月にわたり、脈々と宝寿院を支え続けていただいていることに對しまして、深く感謝申し上げます。

さて私こと田辺信雄は、先代逸雄和尚遷化にともない、曹洞宗管長様から宝寿院第三十一代住職を拝命し、今日まで勤めてまいりましたが、一方で学校の教員も兼務しておりましたため、檀家の皆様へは、何かと迷惑や不自由をおかけしておりましたことに、常々申し訳なく思っていました。

そこでこの度、私は住職としての勤めに専念すべく、また、他にも心に強く思うところがあつり、この一月三十一日をもつて、教員を退職することといたしました。

それは、私に残された人生を、檀家のみなさまや、地域の方々、加えて、宝寿院を支えてくれた数知れぬたくさんの方々の先祖への恩返しをさせていただきたいと願う報恩感謝の一念によるものです。寺報の名称「宝寿の風」も、お寺から檀家や地域のみなさまへ、温かく和らいだ幸せの風を吹かせたいという願いを込め

て命名したものです。また、菊水紋は、この寺を開くにあたり基となった法志庵という草庵が、菊水を家紋とする楠木正成公の嫡子正行公正室の加富貴御前により開創されたことに因んだものですが、このことについては後の号で詳しくお知らせします。

檀家の皆様には、これからも何かとお世話になります。どうぞお力添えを下さいますようお願い申し上げます。

合掌

百年ぶりに復活「新春開運法要」

平成二十年の大晦日午後十一時三十分から、平成二十一年〇時三十分にかけて、年をまたいだ新春開運法要が、宝寿院本堂においてほぼ百年ぶりに復活実施されました。

復活のきっかけになったのは、「初詣は、まず先祖の眠る菩提寺に参るのが先ではないか」という、ある檀家さんからの素朴な意見でした。家庭や地域の崩壊が暗い影を落とす昨今ですが、私は、お寺が地域のコミュニティー復活の一翼を担いうる重要な存在の一つだということに常々考えていましたし、何より護持会役員さん他有志の方々の「やろう」という熱意に触れて、多少の準備不足は承知の上で、始めるなら今と決心しました。

当日は冷たい風が吹く中、早くから護持会役

員さん他有志の方々が集まり、テントの設置、参拝者へ振る舞う甘酒の用意、かがり火や焚き火の準備、照明やライトアップの設置など、たくさんの方々の仕事を手際よくこなし準備してくれました。

檀家や地域の方々への周知期間が短かったことや、何より地元のお寺で行う新春開運法要に、どれくらいの方が関心を示してくれるかも未知数でしたので不安も多少ありましたが、時間になると、親子連れや、遠く太田市や吉田の檀家さんなど、思いの外たくさんの方々が参拝してくれました。復活元年としては大成功だったと思います。

今回の経験を生かして、今年の大晦日にはもう少し趣向を凝らしたものにしたいと思っておりますので、その節は是非ご参加下さいますようお願いいたします。



庚申堂平成の大改修なる

庚申講は、帝釈天の使者である青面金剛尊（しようめんこんごうそん）を祀り、村内安全、五穀豊穰、二世安樂、悪疫退散などを願う信仰として、平安時代以後、貴族や一般民衆に広まり、特に江戸時代には全国各地で盛んに行われてきたものです。しかし、今では所々に庚申塔が残っているだけで、信仰そのものはほとんど姿を消してしまいました。そんな中、寄木戸の庚申講は絶えることなく、嘗々と今に受け継がれています。しかも、狭いながら徹夜のためのお堂を備えていて、全国的にもめずらしい存在です。（庚申講の夜は、寝てしまうと自分の罪過が帝釈天に報告されてしまうので、夜が明けらるまで寝ずに過ごしました。）この庚申堂に祀られている青面金剛尊は、享保三（1718）年造立の立派な石像で貴重なものです。

さらに寄木戸の庚申さまは、昔から願を掛けるとイボが取れる御利益があることでも知られています。寄木戸に今ある庚申堂は、明治三十一（1898）年に建立されたもので、その後二度改修されています。

当初部分的な補修の予定で始めた今回の改修は、思いの外痛みがひどかったことから大改修となりましたが、結果的には、地域の信仰によつて支えられてきた伝統を、後世に永く伝え

ていくのにふさわしい庚申堂となりました。

そこで今年は、今回のこの大改修を記念して、毎年旧暦の十月十六日（今年は十二月二日）に行われている例大祭とは別に、3月の庚申の日に、宝寿院護持会の行事として、初庚申を左記の通り実施することとなりました。ご多用中のこととは思いますが、是非この記念行事にご参加下さいますようお願い申し上げます。

記

日時 三月十六日(月) 午後六時から
場所 大泉町寄木戸433 庚申堂

古戸泉福寺の団参に同行して

今年の十月、期せずして、泉福寺の総代さんや檀家の皆さまとともに、私他宝寿院の総代3人が信州への旅に同行させていただきました。

泉福寺と宝寿院は、ともに小泉龍泉院の末寺であり、私の祖父太堂和尚は、泉福寺明文和尚の曾祖父にあたる関係です。また、宝寿院のある寄木戸地区と泉福寺の古戸地区とは、隣村同士の関係もあり、昔から住民の交流もさかんな地域でもあります。そんな縁の深い古戸泉福寺の関係者の皆さまと、終始なごやかな雰囲気の中で楽しい二日間を過ごすことができました。

ところで、たくさんある仏教の教えの中に、「因・縁・果」の教えがあります。たとえば、

種を撒いただけでは作物は立派に実りません。

農夫が種を撒くことが「因」となり、草を取り、水や肥料を必要な時に必要なだけ与えることを「縁」として、作物が立派に実るという「果」が得られます。これが結果であり果実です。縁がいかに大切であるかを教えています。同様に、私たちは皆、多くのご先祖様の計り知れない苦難の生涯を「因」として、また、ご先祖様が脈々と築きあげてきてくれた地域や人間関係などを「縁」として、今こうして平穏に生きていられるのだと思います。ですから、ご先祖様に感謝しないではいられないわけです。

そう考えると、今回のことも、決して偶然のことではなく、ご先祖様の導きによるものだったようにも思えてきます。

旅の中で、明文和尚の法友が住職を務めておられる長野県上田市の東昌寺というお寺を訪ねました。深い山の中にある大きく立派なご本堂や、良く手入れされた境内の植栽には、皆ただただ驚嘆するばかりでした。その立派なご本堂の中で、ご住職様を導師として、明文和尚と私の三人で、泉福寺・宝寿院の檀信徒のご先祖様への供養のお経をあげて参りました。ご先祖様もきつとお喜び下さったものと思います。今回の旅は、正にご先祖様への感謝と供養の旅でした。